

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 朴 光賢

論 文 題 目 ソウルオリンピックを契機としたソウルの都市改
造に関する研究

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科教授 片木 篤

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科教授 清水 裕之

副 査 名古屋大学大学院環境学研究科教授 西澤 泰彦

論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

本論文は、ソウルオリンピック（1988年）会場の計画・実施を詳らかにするとともに、それとソウル全体の道路網計画・公園緑地網計画との相関、オリンピック主会場が置かれた蠶室（ジャムシル）地区計画との相関を分析することにより、オリンピックを契機としたソウルの都市改造を明らかにしたものである。

第1章では、1960-80年代におけるソウルの都市基本計画を取り上げ、幹線道路・高速道路計画をソウルの特異な地形に照らし合わせて分析している。「都市基本計画'66」では、格子状道路網をもつ既存都心部を中心として放射環状道路網が計画され、「都市基本計画'78」では、漢江とその支流にそれぞれ平行な幹線道路を通すことで格子状道路網が計画されていたが、「都市基本計画'80」は両者を折衷し、既存都心部で交錯する双曲線状の幹線道路が計画されたと見ることができる。

第2章では、ソウル都市計画用途地域の緑地地域を取り上げ、緑地地域計画の変遷を地形と照らし合わせて分析している。60年代後半、ソウル市外縁の外四山近傍に分散配置されていた「山」の緑地地域が、1971年の開発制限区域制定に伴い環状に結ばれ、文字通りの「緑地帯」が形成された。「建設部告示320号」（1978年）では、漢江支流沿いが緑地地域に指定され、その「川」に沿った格子状緑地地域が「山」の緑地地域と連結された。1980年12月の宅地開発促進法制定以後、80年代には漢江支流沿いの緑地地域の先端部が宅地として開発され、「山」の緑地地域と「川」の緑地地域が再び分断されたと見ることができる。

第3章では、オリンピック主会場が置かれた蠶室地区を取り上げ、地区計画の変遷を分析している。「蠶室地区総合開発計画'70」では総合運動場をもつ住宅地区と位置付けられ、大街区を規則的に分割して街区とする計画がなされたが、「蠶室地区総合開発基本計画'74」では大規模業務機能をもつ副都心と位置付けられ、地区中央の商業施設から発する放射状道路で大街区に分割する計画に変更された。前者はオリンピック主会場の1つ、ソウル総合運動場の最初期案が描かれている点で注目される。

第4章では、招致申請時から開催時までのソウルオリンピック会場計画の変遷を辿り、それと公園緑地網計画・道路網計画との関係を分析している。既設を除く競技施設のほとんどがソウル都市計画用途地域の緑地地域に立地、特にオリンピック主会場であるソウル総合運動場とオリンピック公園が漢江及びその支流沿いの緑地地域に立地していること、更に漢江に沿った道路、それを渡る鉄道道路併用橋が優先的に実施されたことを明らかにしている。

第5章では、オリンピック主会場であるソウル総合運動場とオリンピック公園を取り上げ、それぞれの配置計画の変遷、アジア選手村、オリンピック選手村との関係を分析している。両者は蠶室地区中央の商業施設に対して点对称の位置に置かれ、会場南側道路と向かい側の選手村を合わせると相似形となっていること、前者では主競技場、後者では野外公演場を中心に放射状に競技施設が配され、かつその主軸に沿ってアジア選手村、オリンピック選手村の住棟が配置されていること、東西幹線道路の蠶室路がオリンピック公園内の城趾に「山当て」されているが、それ以外、蠶室地区では大街区間をつなぐ計画がなされていないことを明らかにしている。

以上のように、本研究は今までほとんど研究されてこなかったソウルオリンピック会場の計画・実施を取り上げ、それを都市・建築デザインの観点から分析すると共に、都市全体の道路網計画・公園緑地計画や地区計画に位置付けたもので、ソウルの都市論・近代都市史に新たな視点と方法を提示したという点で、学術上、寄与するところが大きい。よって論文提出者、朴光賢君は博士（建築学）の学位を授与する資格があるものと判定した。